
スノードロップ

面映ゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノードロップ

【Nコード】

N4173Y

【作者名】

面映ゆい

【あらすじ】

高校卒業後、浪人して受験勉強に励む浅倉悠弥はひょんなことから母親の知り合いが大家のアパートで暮らすことになる。引っ越しの挨拶の時に会ったアパートのお隣が気になりはじめる。受験生なんだから恋をしている場合ではないと自分に言い聞かせても、どこか仄暗く儂げな彼女が頭から離れない。自分は受験生、なんと彼女は専業主婦だった。

アパートのお隣さんから奇妙な関係になり、その成れの果てとは？

1 (前書き)

がんばって書きます。今までで一番長編にするつもりです。よろしくお願いします。

1

10月から母親の知り合いが大家をしているアパートに住むことになった。

去年高校を卒業し、一浪して大学を受験することを決心し、一年間あるからと余裕を持っていた。

家には母と父とそれときようだいたちが三人もいる。

双子の弟二人と妹は現在高校一年生と二年生なので受験勉強には理解を示してくれている。時たま部屋で大音量で音楽を聞くのでその時は注意をする。

しかし、高校を卒業した月に起こった大震災の所為で今年の七月から、母親の妹とその夫が家に居候し始めた。

彼らの家は全壊してしまってもう思い出のアルバム一つない…。

母親の妹の夫は宮城県出身でそちらの親族は大ダメージを負うことになった。

そして妻の故郷であり、妻の姉の家に白羽の矢が立てられた。もう他に身寄りがいないのだ。

地元で結婚した自分とは異なり東北出身の男と寄り添い、嫁いで行った妹が震災の影響とはいえ、帰ってきたのだ。姉である母親は嫌な顔一つせずに二人とその子どもたちと一時の家族になることにした。

別に居候は構わなかった。

緊急事態であるし、弟たちも同じ気持ちのようだった。それに家では基本的に勉強しているので部屋から出ることも少ない。他人が増えてもさほど気にならない、はずだった……しかし二人はまだ四歳の息子と今年小学生になった娘を連れて千葉へ来たのだ。

子供はよく笑い、よく泣く。

まだ十歳にも満たない子どもたちに静かさを求めるのは大変難しい。

最近は友達もできたようで家の前で楽しそうに遊ぶ子どもたちは非常に元気だ。

はつきり言う、もの凄くうるさい。

公園は少し離れたところにあるのでまだ小さな子どもたちに、うるさいから家の前で遊ぶとも言えず、耳詮の購入を考えた程だ。

そのうるささにはなかなか慣れることが出来ず、一時期子どもが嫌いになりそうな時もあった。部屋の扉を開けさえすればこの家の廊下にはその元凶である子どもたちがいるのだから。

子どもたちの母親が注意してもなかなか声は収まらない。母親は子どもを非常に溺愛しているのもあるし、その母親の姉である彼女も、妹とはいえ他人の子どもに過剰な干渉はできなかった……というより、言ってもその子どもたちは言うことを聞かなかったのだ。

大学受験を控えた息子が大変迷惑そうにしていたので、みかねた母親は、寒くなり家での学習時間が増えるであろう追い込みでもある季節に、息子を知り合いが大家を勤めるアパートに寄越すことにした。

代金も友達のよしみでかなり安くしてもらっている。
千葉土産を渡し丁寧にお礼を言ったのが昨日。

ついさっき引越しの荷物が届くと連絡があり、昼食を買いに行った
コンビニから、アパートに向かい歩いているのが今日。

今現在だ。

アパートを見上げ、浅倉悠弥は小さくため息をついた。

「アパートの名前、七階荘ってどうなんだよ……。二階建てじゃねー
か、意味わかんねえ……」

どこにでもありそうなアパートでも、外装はかなり古かった。しか
し入ってみると中はとても綺麗で、頑丈そうである。

昨日大家さんに「中々入居者現れないから一部屋くらい大丈夫。家
賃は半額払ってもらうけど……」と言われたが、それは仕方ないこと
のように思う。外見と部屋の狭さ、……そして一番の問題はマンショ
ンの前に大きな踏み切りがある。タイミングだとおもうが一度にた
くさん線路に電車が来たらかなりうるさいはずだ。

まだ引越したばかりで何本線路が通っているかは見ていないが、
こんなに広い踏み切りはあまりないと思う。このうるさい音が逆に
防音になっている。……気がする。おかしい見方だけれど。赤いラン
プの点滅する音が部屋に響いて何も聞こえなくなる。それはこのア
パートのどの部屋も同じはずだ。試しに歌でも歌ってやろうかと思
った程だ。

緑の扉を開けて、玄関を過ぎるとすぐに、ダイニングキッチン。奥に押し入れがある。そこも過ぎると八畳の洋室。そしてバルコニー。風呂、脱衣場、トイレは三つともダイニングキッチンに隣接している。

日当たりは良好なのがせめてものポイントだと思う。

料金は三万円。悠弥はこれを半額に思っている。

値段は控えめでバス停まで徒歩三分。

一人で暮らすなら悪くないと思うが、いや、もっと広いほうがいい。踏み切りの音もうるさい。

最初は焦ったがなんというか、案外こんなものなのかと思ったが、意志のない信号の役割しか果たさないその踏みきりの音は人の話し声や笑い声、騒いだ声より万倍ましだった。

ここに将来住めと言われては首を縦に振ることができないけれど。

こんなアパートである。

勉強目的で利用するならまだしも本格的に一生を過ごすなら余程物欲のない人間でないと住めないように思う。

本棚、鏡、テーブルに椅子、ソファア、箆筒にテレビ、パソコン、たくさんの電化製品にその他もろもろ。

もしこの間取りで全部どうにかしろと言われたら自分なら困ってしまう。部屋がひどく窮屈になるだろう。

現代にはこれでもかと言うほど家具が溢れているのだ。

狭いのは元々わかってはいたので、この部屋で生活するために千葉から持ってきた荷物は少ない。あと数十分後に開くだろう段ボールには一体数少ない何を入れたかを思い出してみる。

：だめだ、参考書類しか思い出せない。

高校三年生からずっと頭が受験のままだ。もし来年合格したら脱殻になってしまいかもしれない…。

着替え、冬用の衣類、ノートパソコン、あとは何だったか。洗濯機に電子レンジ、テレビやらはもともとアパートにある。

この部屋の狭さ、玄関を開けると外には踏切。古くさい外見。内装は最近新しくしたの中はとても綺麗なのだが、これで電化製品の一つや二つ、ついていないと、本当に誰も入居者はいなくなると思う。

引っ越してきた昨日は雨が降って10月初めとは思えないほどの寒さだった。千葉から直接持ってきた衣類をできるだけ着込んで寒さを凌いだ。

急な寒さと引っ越しの疲れとで（なれない土地に來た訳だし電車が苦手な男もいるんだ）、自分の他にいらっしゃるらしいアパートの住人に引っ越しの挨拶をしなければならない。

このアパートに好んで暮らすような住人は千葉土産、落花生を受け取ってくれるだろうか。

引っ越しの挨拶は人生初だ。少し緊張する。

このアパートには住人が大家と自分の他に三人いるらしい。

お隣さんは神田さん。

下の一回には三井さんと真坂さんが住んでいる。

一体自分以外の住人はどういう理由でここに住んでいるのだろう。

まさかアパートが出来た後に踏み切りが出来たわけでもないだろう。コンビニに行く途中で、このアパートの一階の部屋に入る人影が見えた。こんなに受験勉強に時間を割いているのに悠弥の視力は落ちることはなかった。身長はあまり高くなかったように思う。髪型や体型を考えると性別は男ではないだろうか。

アパートについた悠弥は手続きを済ませて少くない量の段ボールを受け取った。

昨日から部屋のフローリングの隅においてある落花生を持ってアパートの扉を開けた。

「……」

丁度電車が通っている。踏み切りで待っているらしい女の長い髪が電車からの風になびいていた。

とりあえず、三井さんから引っ越しの挨拶を始めてみよう。

まだ慣れない少し急な階段を慎重に降りた。

インターホンを押す。

最近インターホンのない所も珍しいが、あまりに見た目が古いので心配した。

「…はい」

扉が開いて一人の男が出てきた。

やはり背は低ようで、悠弥より10センチくらい低いかも知れない。

「あの…昨日二階に引越してきた浅倉です。よろしくお願いします
す…これ」

ポップなパッケージの箱に入った落花生を手渡した。

「三井です。よろしくお願いします…すみません、いただきます」

三井は礼を言うと、「じゃあ回覧板、俺の次、浅倉さんかもしれない
せんね」と言った。

「あの…。真坂さんと神田さんって今、いますかね？」

現在3時前。コンビニで買ったサンドイッチを食べたり、届いた荷
物を見たりしていたら思いの外時間を食ってしまった。

「神田さんは多分いますよ！…真坂さんは今はいないと思います。
多分大学なんで…。夜には帰ると思います。でもあんまり遅いと真
坂さんには会えないと思います」

三井の態度がなんとなく変わった。あまり真坂とは仲が良くないの
かもしれない。真坂さんは夜にバイトをしているのだろうか？深夜
のほうが断然時給は良い筈、バイトではないなら健康的に早寝早起
きを心掛ける人かもしれない。それよりも悠弥はこの年齢不詳な彼
が今は気になるのだった。

「…？…三井さんは大学生じゃないんですか？」

「俺も大学生ですよ。今日午前中だけだったんで、授業。そういう浅倉さんは大学生じゃないんですか？…もっと年上にも見えますけど」

「あ、俺は今高校卒業して浪人の身なんで、大学生じゃないんですよ…」

「…え、俺より年下ってことになるんですか？今年19？」

悠弥が頷くと、見えないです。せつかく飲み友達になろうと思ったのになあ。彼は項垂れた。

「……あ、俺まだ挨拶終わってないんで」

「うん、じゃあまた」

できることなら三井の家にお邪魔させてほしい。

いったいどうしたらこの狭い間取りでやっていけているのか。

彼は自分とは違い、ここから大学に通っている。つまり期限などないのだ。

悠弥のアパートを借りる期限もわからないが、本当に借りているといった感じで生活感はない。とは言っても昨日越してきたばかりだが。もし大学合格後、ここで暮らせと言われたら困る。買いたい物、置きたい物がたくさん出てくるだろう。

三井さんの隣の真坂さんへの挨拶夜にした。

悠弥はもう一度部屋に戻り、また新たなお土産の落花生の入った袋を下げて隣の神田さんの部屋のインターホンを鳴らした。

適当な種類を選んだので、三井に渡した物も、大家さんに渡した物も、今手に持っている物も違う。これは先ほど三井に渡したものは違い、かわいいパッケージで殻はなく、チョコレートがコーティングされた物だ。

「はい…」

数秒後、扉が空いた。

出てきたのは女だった。黒く豊かな長い髪。真っ白い肌。血の色を思わせる紅い唇。

黒目の割合が些か多いのではないかと思われる丸い瞳はどこか暗さを孕んでいた。悠弥は胸が高鳴った。顔に熱が集中して、今日は寒いはずなのに熱い。

顔、真っ赤になっていないだろうか。心配になる。

「あの…？」

黒いスカートにグレーのセーター。大人びた洋服のわりには幼く見える。

いったい幾つなのだろうか。

線の細い体つきは中学生にも見える。服装や雰囲気からして高校生だろうか？

ひょっとしたら同じ年かも知れない。

「…、…すいません。昨日から隣に越してきました。浅倉です」

大きな目に、じっと見つめられて緊張してしまう。

幼い顔つきに反して、背はスラリと高く、子どものようにもあり、落ち着いた雰囲気は物凄く大人びている。

「…神田です。こちらこそよろしくお願いいたします」

「あの、これ…千葉土産なんですけど、よかったら」

「わぁ、ありがとうございます！主人といただきますね！」

微笑んだ…すごくかわいい。暫く見蕩れてしまった。先程何か不釣り合いな言葉が聞こえた気がする。

手渡された落花生のパッケージを見ながら嬉しそうにする彼女の薬指は銀色に光っていた。

そんな、まさか。

中学生くらいに見え（最近の中学生は背が高いと思う）、服装や物腰から高校生かもしれないと思ったが、まさか既婚者？16で結婚したのか？

「母といただきますね！」とか「父といただきますね！」とか、「姉といただきますね、一緒に住んでるんです」とかそんな風に言われたほうが納得できたかもしれない。イメージが片親だったり、兄弟1人だったりするのは、この部屋は一家で暮らすにはあまりにも狭いからだ。

案外そのシンプルな指輪も少女のお洒落かもしれない…。

「でも、いま主人って…言ったよな」

「はい！？今、主人は仕事ですので、帰りは9時半くらいかと」

「……そうですか」

「あ、よかったら今日家でご飯食べませんか？浅倉さんとはお隣さんとしてこれからお世話になりますし：昨日買った日本酒があるんです。私も主人もあまりお酒はあまり得意ではありませんので嫌いではなかったら：」

「いえ：ちよつとまだ、荷物の整理とか、あつて」

ショックで頭が働かない。今、一目惚れしたかもしれない相手が既婚者で：。中学生に一目惚れもなかなか大変な気がするが既に結婚している女の人よりは希望の大きさが違うと思う。それでも悠弥は動揺を抑えながら声を絞り出した。

「：あの、勘違いしてるみたいなんですけど」

「はい？」

「俺は去年高校卒業して今は浪人してるんです。家ではちよつといろいろあって：これから受験で忙しくなるんで親が氣い回してくれてこっちに：19歳、です。まだ酒は飲めません」

「ごめんなさい、もうてっきり社会人だと思ってました」

「幾つだと思いました？」

「私と同じか、私より上：25歳、くらい？」

「……………」

…神田さん、じゃあそれくらいなんだ…。
若く見える。それは詐欺だ！

「気を悪くされたならごめんなさい。浅倉さん大人びてますから。
背も高いですし。ほら…ね」

神田は身長に反して小さな手を伸ばして、悠弥の前に持ってくる
と腕を上下させて自分との身長差を表した。三井より少し低いか、
同じくらいかもしれない。平均よりは高いはず。もう成長を終えた
妹の平均的な背丈を思い出した。

「…別に、気にしてないです」

すると、部屋に音が響いた。
電話のようだ。

「…受験勉強、がんばってくださいね」

彼女は靴を脱いだ。よく見ると玄関の端に肥料が置いてある。液体
の物もある、何か植物を育てているのだろうか。

スリッパに躓いたのか、滑ったのか彼女の体がこちらにグラリと傾
いた。

悪いと思いながら玄関を跨ぎ段差をも飛び越える勢いで支えた。

「大丈夫ですか!？」

彼女の身体は折れそうなほど華奢で弱々しかった。

「大丈夫です。すみません、貧血で」

「どこか身体が悪いんですか？」

初めて少し話したばかりの人間にしては図々しいかもしれないが、訊いた。

彼女が、どうしても気になる。

「…少し、貧血で。でも大丈夫です」

その後も何度か神田は言う。

大丈夫です。大丈夫と。

「こんな貧弱に見えて、身体は頑丈なんです。風邪なんて全然引かないし、高校生の時クラスでインフルエンザが流行った時にもかからなかった…ふふ。丈夫なんですよね…身体は」

「……」

「電話切れてしまいましたね、掛け直してみます…」

「神田さん」

「はい？」

「俺のほうが年下なんだから、敬語はいいよ。名前も呼び捨てでいい」

「はい、わかりま…わかった。浅倉くん」

「じゃあ…」

部屋の奥へ進む彼女を見送り、部屋を出る。

悠弥はノロノロ自分の鍵を出して部屋を開けた。
グリーンの扉は異様に鮮やかだった。部屋に入り乱暴に扉を閉めると、ずるずると玄関にしゃがみこんだ。

未だに火照る顔。

いつもより多い心拍数。

「マジかよ…俺、どうすりゃいいんだ」

焼き付いて離れない微笑。

どこか薄暗さを含む瞳。

やわらかな口調。

「…………あーあ、馬鹿か。俺は、…」

悠弥は首を振ると宙に視線をさ迷わせた。

1 (後書き)

不定期更新ですが、よかったらこまめにチェックしていただけたら
さいわいです。

2 (前書き)

二話です。

現在住んでいるアパートの隣の部屋に男の人が引っ越してきた。その人はまだ男の子と呼べる年齢だった。

去年の6月以来、誰もいなかった部屋。

「結婚するからって、もっと広いところに済むんですって」と、大家である日渡から聞いた。前にその場所に住んでいたのは原井という男だった。

「……、はあっ」

貧血なんかじゃない。今日引っ越しの挨拶に来た彼を目にしたとたん胸が熱くなった。
めまいもした。

これはおかしい。

でもきつと気のせい。たまたま体調が悪いだけだ。

昨日夜遅くまで起きていたから。

だから、それだけ。

そう、それだけなの。

第一、夜になると夫が帰ってくるのだ。

ただ、久しぶりに見た若い男のひとに不覚にもときめいてしまっただけだ。

誰にだってある。案外魅力的な異性はなんとなく目で追ってしまうものなのかもしれない。世間の男性諸君の言い訳のようで苦笑いするしかないが。

思い出してみると、なかなかきれいな顔をしていた。背も高く脚もスラリと長かった。

「……」

こんなに惚れっぽかったかな。と、なんとなく今まで恋愛について思考を巡らせてはみたが、どれも参考にならない。

きっと初恋なんて幼稚園だったかもしれないが、真剣に愛して、尽くしてきたのは今の夫だけなのだ。友達に話すと驚かれるのだが。

ぼんやりしている時間はない。夕飯の用意に取り掛からなくては。

高級嗜好の夫がよくもまあ自分なんかの料理で満足してくれるのか未だに謎だが、美味しい美味しいと食べてくれるので、作るこちらとしても嬉しい。

もともと料理は好きだったし、専業主婦なのでいくらでも時間は掛けられる。

あまり高いものや贅沢は苦手なので、普通の一般家庭で使用されるであろう食材を使い、せめてもと手の込んだものを作る。

テーブルの上に置いてある、彼がくれた落花生を見ないように料理に集中した。

「ただいま、未稀」

夜10時ごろ、夫の文弥が帰宅した。

「おかえりなさい」

狭い部屋を移動しながらクローゼットの前まで歩く。未稀は鞆や背広を受けとる。

「今日もお疲れさまです」

「…疲れた」

文弥がネクタイを緩める。

この動作が、堪らなく好きだ。

そして小さめのテーブルに長身を屈める。ちなみにこのテーブルは炬燵である。二人用で場所を取らずキッチンの近くにある。冬場は料理をしながら炬燵の誘惑と未稀は戦うのだ。

「これ落花生…？ どうしたの？」

「あ、今日隣に引っ越してきた人が挨拶に来たの。学生さん…じゃなくて、受験勉強中で浪人してるんだって…男の子だった」

「ふーん。落花生、八街産半立じゃない普通のか…」

彼はパッケージを見て呟いた。高級嗜好は相変わらずでブランドものが大好き。それなのにこのアパートで暮らしているとは、いつも滑稽だ。

文弥は未稀に合わせてくれている。文弥は雰囲気は素朴なものにもかかわらず、やけに派手な物、豪華な物をよく好み、しかしそれが誂えたようによく似合っていた。元々裕福な家に生まれたので、がさつな性格でもどこか上品さが滲み出ていた。

付き合い初めの頃なんとなくそんな話を彼に話したが、彼曰く自分

のほうがよくぽど品があるらしい。しかし、あくまでも一般教養として祖父母に教わったので人並みだと未稀は今でも思っている。

「ま、美味しければいいよ、普通に…」

「……………」

昔はこんな風に彼は言わなかった。そもそも思いもしないだろう。きっと結婚する前は食べているものも違っていたのではないだろうか。

彼のお母さんがかなりの財産家で、彼のお父さんも彼のお母さんまではないなかいが生活するお金は潤沢にある類いの人間である。

そんな環境で育った彼が

『普通に美味しければいい』なんて言うとは…。

この変化は、今この時だけではない。彼は変わった。

「文弥…」

「なに？」

「ううん、なんでもない。ごはんにしよ、落花生は後でね」

二人敷いた布団に寝る。寒いので毛布にくるまる。暑かった九月とは大違いだ。

八畳の洋室は夜は布団を敷き、昼は小さめのソファを置く、現在は部屋の隅っこにある。折り畳みの大きめのテーブルはダイニングキッチンのある部屋の壁に立て掛けてある。特に、客や友人が来たときに使われる。常にダイニングキッチンにあるテーブルは、炬燵つきで便利だが、あくまでも二人用だ。

「引っ越してきた男の子、どうだった？」

「さっきも言ったでしょ？浅倉くんは20じゃないから一緒にお酒飲めないって…」

引っ越してきた彼のことを、食事中に詳しく文弥に話した。日本酒は二人で呑んだ。ちびちび呑んだのでまだ3分の2くらい残っている。

「…浅倉くんって、仲良くなるの早くない？」

「へ？敬語はいいですって言われちゃった」

文弥は力を込めて未稀を抱き締めた。

「…もう、酔ってるの？」

「未稀だって、顔紅いよ？」

「そんなに誰かと飲みたいなら三井くん誘ってみる？ ゴミ出しでも会おうし、ポストの所でも会うから声、掛けてみようか？ …なんなら明日にでも直接声掛けてきてもいいけど」

文弥の職場の同僚を呼んでもいいのだが、その同僚たちの中に、あまり文弥と仲が良くない者がいる。

一人だけ誘ったら、なんだかんだで人数は増えてしまい、まとめて家に招いたことがある。

そうしたら会社の同僚が未稀を気に入ってしまった。しかもその同僚は文弥と仲の悪い、彼だった。

それはこのアパートの狭さが身にしてみた日でもあり、八畳の部屋はぎゅうぎゅうになり、誰かを部屋に呼んで酒を飲むなら少人数と決めたのだ。

「三井くんはいいよ。若いし」

キッパリと文弥は言った。

「じゃあ浅倉くんはいいの？ 呑めないけど浅倉くんだって若いよ？」

「だって、浅倉くんの方が三井くんより年上に見えるんでしょ？」

「まあ、そうなんだけど。そういう問題じゃ…」

「第一俺三井くんはあんまり合わないんだよね」

「どうして？」

「なんか：素朴って言うか、シンプルって言うか。あんまりごちゃごちゃしてないだろ、俺もつとごちゃごちゃしてる人のほうがすき。後贅沢とか豪華なのすきじゃないみたいだし、俺たちがご馳走してあげればいいのかもしれないけどさ」

真珠の価値を知っていたとしても、それを欲しがらない奴にくれてやる義理はない。

「私だって、豪華な物、贅沢な物すきじゃないよ？」

「未稀はいいの、高級食材使わなくても料理おいしいし、飽きないし。それに、ごちゃごちゃしてる」

「ごちゃごちゃって：。でも文弥が高級とか、ブランドとかそういうのに離れるとは思わなかった。昔は全身ブランド物で固めてたもんね」

「昔はね」

それでは、あのシンプルな三井に合わないはずだ。

文弥がそういった物から離れたことよりも、彼がブランドに固執しだすほうがよっぽど大事件に思えてしまう。

前者でも相当な大事件なのに。

文弥は家が裕福で、未稀とは暮らしも着る物も食べる物も違っていた。

桁が違うではすまされないほどの違い。

その所為もあり、彼からはお金を多く所有する者特有のオーラや態度が抜け切れていない。このアパートに住み始めても、今でも。

しかし彼は変わった。未稀のために。

「こんなに高いものもらえない」

苦しみながら何度も言ったプレゼントの返却の言葉にめげず。

「家政婦なんて、私がいるから雇わなくていい」

「こんなに広い部屋、いいよ。使わない部屋、たくさんあるじゃない」

結婚してからの譲らない未稀の意見に折れて。

それが今、このアパートに住んでいる結果とイコールはしないのだけれど。

ぶつかって、話し合って、未稀が折れなかったら文弥が折れる。

惚れた弱みでもある。未稀が時たま変に意固地になるためでもある。

未稀は大人しいが、決めたことは最後までやり通す。

弱々しい外見とは裏腹に芯の強い気丈な内面。

それが見え隠れして助けたいような引っ張ってもらいたいような気持ちになる。

「文弥：あなたは私の為に全部捨ててくれたのに。私は未だに何も変わってない…」

「未稀、それはもういいんだ。変わらなくていい。未稀を愛してるのに変わりはない。俺はね、未稀が俺を愛してるならそれでいいんだよ。プライドとか見た目とか見栄とか、どうでもいい。もう…」

「…でも」

「それに変わったよ。未稀も」

「どこが？」

「きれいになった、どんどんきれいになってく…」

未稀は文弥の腕の中で失笑した。彼は真剣なのに。

「今にそんなこと、言えなくなるよ。年を取るのは早い…といいんだけど」

「そんなのだめだよ」

冗談ばく文弥が言って、そろそろ眠ろうと瞼を閉じた未稀にキスを落とした。

「おやすみ」

午後7時頃、悠弥は真坂の家の前にいた。

「はぁ、引っ越してきたんですか：千葉から？」

真坂はおとなしそうな女だった。

黒く、肩に届くくらいの黒髪。

大学三年生という年齢から、同じような雰囲気醸し出す未稀よりも清純そうに見えてしまう。

ピアスを開けていない耳。薄い化粧。染髪ではないだろう黒髪。未稀とはまた違った地味な服装。

まだどこか野暮ったさが拭えない。それは彼女が時代錯誤のような眼鏡（そこら辺の女性が掛けているものとは明らかにかけ離れている）を掛けていることもそれを助けているように思う。大学に入り三年も経つというのに。

そんな印象をもってしまうのは悠弥がまだ大学にも通っていない浪人生だからかもしれない。

大学に進学したからといって誰でも身を飾りだすとは限らないのだ。

「はぁ：あの、これどうぞ、千葉土産です」

「：ありがとうございます！！わからないことがあったら何でもおっしゃってくださいね」

なぜこの女は19で年下なので敬語はやめてくださいと言ったのに敬語を使い続けているのだろう。

丁寧な物腰は未稀と同じで、こんなにも柔らかく笑うのになぜ、強い圧力を感じてしまうのか。

小指に光る指輪が異様に輝いていた。

「…ありがとうございます」

「うふふ…いえいえー」

そう言うと、彼女も外に出た。扉の鍵を閉めた。

右手に悠弥のお土産を持ち、左肩に黒いシンプルな鞆を掛けた。何処かに出掛けるのだろうか。

「どちらへ行かれるんですか？」

「今夜、彼氏の家にお泊まりなんです」

「…そうですか」

それ以外のリアクションが返せなかった。

しかし彼女も成人を終えた大学三年生。自分の行動に責任を持てる年齢だ。外泊なんてよくある話かもしれない。

「それじゃあ失礼しますね」

にこやかに別れを告げられているにもかかわらず、今すぐここを立ち去れと言われているようで、そんな感じ方をしてしまった自分に悠弥は困惑した。

次の瞬間に常々にこにこしている彼女が真顔になった。

その眼鏡の奥の眼光が鋭すぎて寒気がした。

刹那的ではあったが、品定めされたような…。

これから生活していくアパートの住人に対してこんな感想は抱くべきではない。

きつと目を細めたんだ。

真坂は目が悪いのだろう。それに今は夜、余計に見えにくいのかも
しれない。

こちらからはよく見えて相手からよく見えないのは不公平だ。
なんとなくずるをした気持ちになる。

明日の朝、夕方…陽の出ているうちに会う時もあるだろう。同じア
パートにすんでいるのだから。

「……」

少しこんなことを考えて、はっ。と、気づくと彼女はいなくなっ
ていた。

そんなに何分も考えていたつもりはないのだけど。

足音もしなかった。

彼女はいつの間にか、夜の闇に消えた。

悠弥は、この部屋の広さに合った小さめの敷布団に横になる。

ちなみに、これは大家さんから客用の布団を借りたものだ。一向に
入居者が増えないため、大家さんは余った部屋の一つを物置代わり

に使用しているらしい。

大家さん、結構面倒見がいいらしい。昨日は本当に寒かったので助かった。

ここから通う予備校を探さなければならない。

まだついていないカーテンも買いたい。

悠弥はまだそんなに明るくない月明かりが差し込む窓をちらりと見た。

何色にしようか。いくらのに物にしよう。どこか、この近くにホームセンターかなにかあるだろうか？探せばあるだろう。

目を閉じると今日挨拶した神田のことが頭に浮かぶ。

少し気になっただけだ。そうだ。

たまたま、だ。彼女の黒い瞳の奥になにかしらの暗さを見てしまった。

しかし、それはきつと…誰にでもあることだろう。

疲れているとか、何か嫌なことがあったとか、夢見が悪かったとか…そんな、誰にでもあることなのだ。

案外、居候が始まった頃の悠弥は、家の外、室内と一日中騒がしい子どもたちに辟易して、あんな疲れた目をしていたのかもしれない。

「……」

だいたい彼女は今まで自分が好きになった女とはまるで違うではな

いか。

悠弥はもっと元気で明るくて、神田の薄着なのは見たことがないが、もっと体に凹凸のあるの女が好きだった。

考えないようにしよう考えないようにしようと思っても頭から離れない。

さっさと眠ればいいのに。

彼女は自分のことをどう思っているのだろう…。

「……アホらし」

ため息をつく。どうも思っていないに決まってるではないか。自惚れも甚だしい。

彼女があんなにも嬉しそうにはにかんだのは、手土産の落花生のお陰だ。

少しだけ後悔した。引越しの挨拶の品を、食べ物にしたことを。もし落花生のような食べられるものではなく、タオルなど食べられないものであったなら、少しでもそれを見て自分を思い出してくれるかもしれない。

「ばかばかしい…」

今日は届いた荷物を整理したり、馴れない自炊をして疲れているんだ。

彼女は結婚していて、旦那がいて、自分よりかなり年上だった。足掻くだけ無駄だ、相手にすらされないだろう。そんなことは目に見えている。

自分はなんのためにここへ来た？アパートの隣人にときめく為でも、恋をする為でもない。受験生なんだから…。

悠弥は暗闇の中で、今日は全然はかどらなかったテキストを見つめた。

そして、ぎゅっと目を閉じた。

2 (後書き)

読んでいただいております。千葉県に住みたいな…。悠弥と文弥は最後の字が似てるので最後にチェックするのちよつと面倒です…。

間違っていないかヒヤヒヤします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173y/>

スノードロップ

2011年11月17日14時05分発行